

高密度で急回復

付加価値品が人気

丸井織物

織布最大手の丸井織物（石川県、宮本徹社長）は10年度売上高が53億7500万円となり、リーマンショック前の実績を大幅に上回った。細物の高密度織物がリードし、11年度も前年を上回るペースと好調だ。ここ2年、ファッションにおける軽量の流れを確認し、今期は細物に向く織機も新設して、累計10億円の設備投資が完了する。

丸井織物とグループの宮米織物を合わせた売上高は、08年度が48億6700万円、09年度が40億2900万円で、10年度は急回復した。最大の要因は、ナイロンを中心とした10、15、20ミリの高密度薄地の好調。生産の中身が、定番のタフタから付加価値品に置き換わり、質織りの平均単価が上がっている。開発提案型のテキスタイルメーカーを目指し、06年から取り組む

「スポーツ素材創造企業宣言」の下、生機売も増えた。細物のスペースは年内まで埋まっており、11年度売上高も前期よりも3億〜4億円を上乗せする見通しだ。

高密度薄地の受注増に対応し、生産のスピードアップ、ロス率の低減に注力し、利益を確保する体制作りも進めている。細物は生産性が定番品の半分以下で、「好調な割に実入りがな

い『細物貧乏』に陥りやすい』と言われる。

09年から、同社専用につった低張力に耐えうる準備機の導入を開始。織機は、改造など従来機の延長で生産してきたが、今年は2億円をかけ、細物対応の新機種を入れる。これに伴い、破産した地元企業の工場建物と土地を6億円で取得。ここに、関係会社の良川サイジングが移転し、丸井織物から織機147

台を引き受け、ストレッチを含む裏地の生産を集約する。丸井織物の工場は表地の高付加価値品に特化し、約150台が細物専用になる。移転などは12月までに完了する予定だ。

品目別売りの上げ比率も変化している。裏地は07年の19%から10年が8%に、輸出は18%から衣料中心に30%に高まった。

「丸井と言えは裏地という企業イメージを変えていく」（宮本

社長）とし、国内合同素材展への出展、企画・開発人材の育成、非衣料用途の発信に力を入れる。非衣料は、PLA（ポリ乳酸繊維）製のティーバッグ、粘着テープの基布とともに好調で、非石油繊維で生活資材関係を増やす。

04年創立の丸井織物南通有限公司は内需向けエアバッグとスポーツ地を生産し、10年度売上高が15億円だった。